

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でぽら} 22

2002年
春夏号

特集 先人の知恵と技を受け継ぐ 民家の保存と再生



先人の知恵と技を受け継ぐ [民家の保存と再生]

企画・編集に寄せて

用

炉裏で昨夜の残り炭を掘り起こして炭を足し、薪をくべる。そして板戸をがらがらと開けると縁側に朝日がふりそそいで、一日がはじまる。竈では御飯の炊けるいい臭い。囲炉裏の鍋の味噌汁も煮立ち始めているようだ。囲炉裏を家族が囲んでお膳で朝食。麦飯と味噌汁とたっぷりの漬物が二、三種。

古い民家には土間と囲炉裏と納戸、座敷などがあり、大黒柱や鴨居、梁などが黒光りしている。壁は少なく、障子や襖を開放すると広い空間が生まれ、緑の風が心地よい。

これは日本の各地で40年、50年前に見られた一般的な光景である。

しかし戦前戦後を境に住まいは大きく変わり、かつての民家は軒並み姿を消していき、新工法の家に様変わりしていった。社会体制が変わり、生活が変わってくると、住まいもまた変化していくのは当然だが、ある時期から突然まったく別の家や町並みに様変わりしていくことは、その土地の風土や暮らし、文化を切断することにもつながるのではないか。

住まいや町並みの日本の伝統的な文化を保存し、後世に引き継いでいくために、国や地方もその保存に力を入れるようになった。

民

家が国宝として指定されたのは、昭和12年の羽曳野市・吉村家が第一号で、戦後になり「重要文化財」としての指定が増え、現在200を越える。さらに昭和50年の文化財保護法の改正で、古い町並みを保存する「重要伝統的建造物群保存地区」制度が設けられ、民家の保護が拡大、50地区が指定されている。

しかし、これらの多くは庄屋や造り酒屋、町屋などの堂々たる家が多く、一般の農家は



囲炉裏が魅力的な民家（福島県館岩村水引地区）

住み手を失つと朽ちて解体される運命にある。一方で、修復して再生保存された文化財指定の民家も住まいとしてではなく観光・文化財として役割を変えている。

保存指定しないと民家を守っていけないというところは悲しいが、現状では仕方がない。多くの人が民家を訪ね、昔の人達の暮らしや

大工の匠の技を学び、その土地の風土に触れてもらいたいと思う。

本

誌では、「民家」を集めるに当たり、民家保存の先進地として著名な地域は省略させていただき、比較的観光客も少なく人々が普通に暮らしながら民家の保存に知恵を出し合っている地域を取材した。保存地区指定を受けていない民家や、民家の保存・再生に取り組んでいる建築家や大工さんにも登場していただいた。今回は、民家保存の第一人者である吉田桂二さん（作家、建築家）が取材に応じていただき、会津の民家を訪ねて、多くの住民と交流し、寄稿してくれたことを特色とした。

「観光客が来ている間に、高齢化が進みすぎない間に、住民を増やす定住化構想が必要だ。民家を数多く残す村は、今では風土性を残す地域文化を体現した貴重な存在なのだから、農産物でもよい、食べ物でもよい、手仕事での産物でもよい、その地域ならではのものを生産して、自然環境や民家のたまたま」と氏が生産して、「自然環境や民家のたまたま」と氏が述べていることに、本誌の意図や願いが集約されていると思う。

改めて、木の家の凄さと住み継いできた人々の知恵や努力、保存・再生していくことの大変さを学ぶ取材であった。そしていつものことながら、日本はなんと多彩で豊かな風土の国であるかを実感するのである。

「ではら」編集部
(財) 過疎地域問題調査会

「でばら」とは

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。わが国の過疎市町村の数は1273(過疎地域市町村1171と過疎地域市町村に準ずる特定市町村102の合計)、全市町村の39%にも達しています。過疎市町村は豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、交流をすすめるために、過疎地域と都市地域を結ぶホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として、「DePOLA でばら」をお届けします。回覧し、多くの方にご覧いただければ幸いです。

表紙 写真

左上 / 大内宿の茅葺き民家集落
中左 / 大内宿の吉村・阿部さん
中右 / 竹富島の屋敷囲いと草花
左下 / 館岩村水引地区の民家
右上 / 吹屋ふるさと村、町家街
右下 / 木曽奈良井宿の土産店
(photo by Megumi kobayashi)

西海町外泊 石垣の集落

先人の知恵と技を受け継ぐ [民家の保存と再生] 特集企画に寄せて 2



大内宿 (吉田桂二画)

特別寄稿 文・絵 吉田桂二

南会津民家スケッチ紀行 4

- ・東北の日本海側民家を代表する「中門造り」を数多く残す館岩村の前沢・水引地区へ 5
- ・会津西街道の宿場大内宿は、鉄板被りのかつての姿を捨て、見事な茅葺き屋根に再生した 8
- ・茅葺きの宿、囲炉裏を囲んで手料理三味岩瀬湯本温泉(天栄村) 10

ベンガラと銅山で栄えた豪商たちの街 備中・吹屋ふるさと村(岡山県成羽町) 11

海辺の斜面に暮らす漁民の生活史をいまに 西海町(愛媛県)外泊・石垣の集落 14

飛騨山地・暮らしと収納の知恵 種蔵「板倉」の里(岐阜県宮川村) 17

沖縄・南国の伝統が凝縮した自然郷 竹富島(沖縄県竹富町) 20



宮川村種蔵「板倉」



椎葉村 那須家の座敷

・椎葉で「お屋敷」と、山村の暮らしを守り継ぐ / 那須家の人々(宮崎県椎葉村) 22

・木曽の伝統文化と木工職人の民家町 / 中山道・奈良井宿(長野県檜川村) 26

民家の保存と再生への取り組み

・「壊されるものが何かを語りかけてくる」

民家に学びながら解体・再生

古民家再生普及会(福島県昭和村) 29

・築250年の民家を宿泊・食事処に活用 都心から2時間で行けるふるさと村 (東京都檜原村) 32



檜原村 かんづくり荘

INFORMATION 34

身延山信仰の宿場町・赤沢の講中宿(山梨県早川町) 飛騨の匠技術をいまに(岐阜県古川町) 只見町は民家の里 / 旧五十嵐家、旧長谷部家

古民家再生の団体・会社 35

ブナ材の農家 / 旧佐藤家(新潟県守門村) 25

・平成13年度ビデオ完成! 「川を活かす 里を活かす」 35

編集後記 / 奥付 35



南会津民家スケッチ紀行

文・絵 吉田桂一



南会津への途次、塩原あたりは抜けるような青空のもと、紅葉の見頃だったが、ひと山越えて会津に入ると、紅葉は既になく、雑木林に覆われた山々は、葉をすべて落として、毛布のように柔らかく温かな色合いをしていた。冬がついにそこまで来ている、束の間の暖かさであった。

南会津の地形は細かく、道は小さなトンネルを幾つも潜り抜けてゆく。峠に挟まれた小盆地に、開発の及ばない過疎化した集落が次々と現われてくる。葺き替えるすべもなく屋根が抜け落ち廃屋となった家、新しい家はすべて鉄板葺きでいささか安っぽい。残っている数少ない茅葺きの家も、ほとんどが鉄板で被せられている。雪の深さは、今では鉄板葺きと比例するといつてよいであろう。茅葺きを維持していくのは至難なことである。民家の形は風土の産物ということができ、冬の長い北国の家は大きく、暖かい南国の家は小さい。東北でも雪の少ない太平洋側と、冬の間、雪に埋もれる日本海側では家の

造りが違う。同じ日本海側でも、雪は降っても根雪にならない富山以西と、越後以北はまた違う。日本列島の多様な風土条件は、多彩な民家の姿として具現しているが、こんな様相は世界のどこにも見ることができない。この国の民家も、おしなべて一様に単調なのが常である。この多彩さを風土への畏敬と思えば、日本文化の「こまやかさ」の現われであることに気付く。

しかし、民家は急速に失われていった。重要文化財として保存されている民家は、庄屋など豪農の家が多いが、それにしてもごく少数に過ぎない。普通の人が住む家は、これが文化財であるといわれようと、暗くて寒くて不便で住み心地が悪く、貧しかった暮らしの亡霊を宿しているような家だから、捨て去るのに何の未練もなかったとしても無理からぬことであった。惜しむ声はありながらも、民家は確実に消えてゆく。民家の町並みを保存しようとする住民運動が、全国の各地で期せずして起こってから、

既に約四十年経つ。高度経済成長期の吹き荒れる開発の嵐から、ふるさとを守るうとする運動であった。この運動を受けるかたちで、文化庁が重要伝統的建造物群保存地区の選定制度を定めた。住民の意思統一と自治体の積極策が功を奏すれば、過疎の村が観光客でこつたがえす有様になる。そんな成功例が各所で見られるようになった。

観光客が来て金を落とせば、経済的な意味でじり貧化し過疎化した村にとっては、起死回生の喜びであろう。しかし、村から出ていった人は、やすやすとは戻ってこない。住民は年ごとに高齢化の割合を高めてゆく。この状態を、無住化した観光地への道程と気付けば、背筋が寒くなる思いだ。イベントパークへの道程に他ならぬ。

観光客が来ている間に、高齢化が進み過ぎない間に、住民を増やす定住化構想が必要だ。民家を数多く残す村は、今では風土性を残す地域文化を体現した貴重な存在なのだから、農産物でもよい、食べ物でもよい、手仕事での産物でもよいが、その地域ならではの何ものかを生産して、そこで生きて行く姿そのものが、その自然環境や民家のたまたまといと一体化した「文化村」にしていくこと、これ以外に方途はないのではないかと。大都市の環境が悪そのものになればなるほど、「文化村」に住むことが誇りになるはずだ。



大内宿にて、吉田桂二氏



東北の日本海側民家を代表する 「中門造り」を数多く残す

館岩村の前沢・水引地区へ

先ず館岩村へ直行する。村では「曲り家」と見てほしらしいが、正しくは「中門造り」である。「曲り家」は岩手県の遠野を中心とした、ごく狭い範囲に分布している民家形式で、厩を突出させたL字型平面形の家だが、「中門造り」は前述のとおり、秋田・山形・越後にかけて、広範に分布している。平面型はL字型だけでなく、凹型からH型まである。分布は広範だが、館岩村ほどに数多くまとまって残っているところは他にない。まことに希有な存在なのである。

前沢地区に到着した。南西に山が迫っているので、正午を少し過ぎた時間なのに、陽が陰り始めた。同行したカメラマンの小林さんが慌てている。私の方は慌てる必要はない。絵は陽が陰っても、照っているように描くことはいくらでもできる。小林さんは電柱が多過ぎて困ると嘆く。絵なら描かなければいいのだから、何のことはない。

写真は機械がつくり、絵は手がつくる。今どきの家は住宅産業が機械で造るが、民家は手で造ったものだ。どちらが微妙に風土に適合させうるか。当然手づくりの軍配が上がる。小林さんに悪いから口には出さず、腹の中に納めて考えていた。

「曲家資料館」と名付けた民家が復元的に保存され、公開されている。家の中も外も昔の様相になっているが、当然のことながら、生活感はない。これは観光資源なのである。

村の家々は生活の場だから、中を見ること

前沢地区・曲屋資料館。伊南村の空き家民家を平成2年に移築し資料館として公開している。古い民具も並べて昔の暮らしを再現。地域のお母さんによるそば打ち、藁細工等の体験教室も開催。写真は囲炉裏にて、同館を管理している小勝一男さん



はできないが、おそらくは新しい建材を張り廻して、今様の生活を快適にできる改造が見られるはずだ。それはそれでよからう、民家を保存するからといって、昔ながらの生活を強要することはできない。

しかし、前沢の村内を巡り歩いてみて、いくばくかの違和感があった。民家の形は保存されているが、真っ白な漆喰壁が多過ぎる。ドイツあたりのハーフトインバーの町並みに似ている。学術的な調査をして、どんな仕方で保存するかのリサーチが不足なのではないか。そう思って眺めてみると、この修景の様相には観光客に対しての媚があるように思えた。

目障りなほど多い電柱を放置したまま、資料館を先ず造ったことにも問題があるだろう。家々は私有だから、それぞれに頑張ってもらうことになるが、公的空間については、行政が修景を積極的にリードして、家を修景しなければならぬ住民の希望を喚起していく義務がある。資料館よりも電柱の撤去の方が先ではないか。どうもここでも、手っ取り早く金になる、観光客に媚へつらう商業主義

水引地区の中門造り茅葺き民家



が垣間見えるように思えた。

村の企画観光課で作成したパンフレットを見ると、茅葺き屋根の形が三つ書いてある。切妻・寄棟・入母屋だ。説明文には触れているが、兜屋根が描かれていないのは勉強不足だと言われても仕方がない。中門造りの大特徴の一つだ。雪深中だから高所に窓を付けるための工夫なのである。町並み保存を担当するのは観光課ではなく、教育委員会の方が

適切なのではないか。

少々悪口が過ぎたが、悪意があったことでは毛頭ない。よかれと思うからこそ言うのだ。実を言えば、この後訪れた水引地区で、観光的な顔のない館岩村を見て、安堵したのである。ここはまだ修景の手が及んでいないから、崩れかけた壁に応急処置のボードが付いていた、家の周りに薪や茅束やさまざま

◀橋平六さんの家。囲炉裏で薪を燃すと家中が暖かくなると平六さん



物が散らかっていて、汚くはあるけれども、生活感はあるにあって、外に出て立ち話したり、農作業する人の姿もあった。そういうのは、前沢では人に会うことがなかった。橋さんの家に入れていただく。全く手を入れていないので昔のままだ。土間の囲炉裏に裸火が燃えていて、九才のお婆さんと、弟の七八才の平六さんが迎えてくれた。開け放しの裏の戸口から、大小十二匹の猫が自由に出入りしている。

くのが楽しくてならないという。囲炉裏で燃えているのは、どこかの残材であろう。燃えている木に太い釘が打ってある。火の中に落ちた釘を、平六さんは丁寧に拾い、囲炉裏の端に積み上げている。ここには剛直だった山の民の生活が、変わることなく続いている。隣家の五十嵐恵子さんの家に行く。まだ幼い子供二人と暮らしている。ご主人は若くして亡くなられたという。千葉から嫁いできた彼女は、健気にもこの家を継いで、既の二階に天井の低い広間を造り、客を泊めている。囲炉裏のある土間は全部に板を張りつめてラウンジ化しているが、民家の姿は隠されて



▶古い家を改修して民宿「離騒館」を営む五十嵐恵子さん。千葉県生まれの東京育ち。民家にはそんな都会的センスも加味されている。囲炉裏のある居間と障子で工夫した二階下)



いない。上を見ると、太い梁組みの間に障子が敷き詰めてあって、屋根裏に取り付けた照明器具の光が、仄かに障子紙を通して広がっている。寒い時はこうするが、暖かくなったら障子は外して、屋根裏の架構を仰ぎ見る仕組みだ。この民家再生の方策はお見事というよりない。

民家の保存は、外から見た姿の保存のみではなく、風土から生まれた民家であればこそ、その空間に風土との一体感を楽しんでいく生活がなかったら、保存の意義は半減する。橋さんと五十嵐さんの暮らしは、両極端のように見えるけれども、決してそうではないことに気付かなければならない。風土との一体感を暮らしの中で楽しんでいく人は、そこを訪れた人に、素朴な笑みで答えてくれる。訪問者はそこから、そのことを感得するに違いない。

生活の風土との一体感は、保全された環境の中でなければ成立しない。物質文明に汚染され破壊されていた環境をいかにして保全するか、そのキーを握る大きな要素に「暮らし方」があるのは今や自明だ。民家の保存が村づくり、町づくりの指針となって、社会にアピールできる最大の資質がここにある。金儲けが見え透いた商業主義とは、全く合いません。そこはいい。

町並み保存で「外部は昔のまま、内部はいいようにもお好きなように」といわれ、前記の重要伝統的建造物群保存地区においてもそのように指導されているが、この方法は石や煉瓦などを積んで造ってきたヨーロッパで培われてきたもの、直輸入の思想に過ぎぬ。日本の民家は表裏一体に造られているため、生活的な要素が外にまで出ざるをえない。五十嵐さんの家は、その模範回答といってよい。

会津西街道の宿場大内宿は、鉄板被りのかつての姿を捨て
見事な茅葺き屋根に再生した





◀大内の茅葺き民家集落。土産店は軒から外に出さない、自動販売機は置かない、土産品は原則として地元や近在のものを扱う等を取り決めている

翌朝は下郷町の大内へ向った。北上してゆく道は、かつて会津西街道と呼ばれた会津盆地から江戸を目指す道で、今市からは日光道中になる。

この街道は、日光道中の宇都宮から分かれて、白河の関を通り、北上していく奥州道中の西に平行する脇街道であった。奥州道中は「天下の五街道」の一つで、幹線街道のため、物価も高く金がかかる道であった。

会津盆地からは、西街道を通った方が近いし、物価も安い。物流のルートとして最適ということで、荷付け馬を何頭も引いた人が行き交ったという。大内宿にはそうした人達が泊るので、別名、馬宿とも呼ばれた。宿内の道幅の広さ、家と家との間の広さは、人の数に数倍する馬の数のためである。

大名は参勤交替の時、正規の街道を通ることになっていたので、会津の殿様は奥州道中

を行かねばならないのだが、隠れてこの西街道をよく使ったらしい。幕府に知れて叱責されたこともあったという。

宿内に本陣が復元されているが、正規の宿場ではないから、正しくは陣屋と呼ぶべきだ。本陣は宿内の大庄屋の家が指定され、その一部に大名一行を泊める座敷が付加されたもの、陣屋は大名一行のみの宿泊施設である。

三五年ほど以前に、ここを訪れた時は、人っ子一人いない道に、鉄板被りの民家が、まるで野良犬のようにみずばらしく居並ぶ町であった。それが今では観光客でこったがえす商店街になっている。慶賀至極といってよい。保存運動が行政を動かし、重要伝統的建造物群保存地区の選定を取り付け、鉄板被りが大方取り除かれて、大きな茅葺き奇棟の美しい屋根が揃比する町並みに再生した。

しかし、案々とできたわけではない。宿の中程にある手打ち蕎麦屋のご主人、吉村徳男さんは、以前は町の職員であったという。職員を辞して、たった一人残った茅葺き職人から技術を習得し、仲間を集めて茅葺きの「結」をつくって、宿の屋根を再生していったのである。素晴らしいリーダーが誕生したのだ。

道が広いことをよいことに、商品をやらせると道に出してきたり、目立ち過ぎる看板を立てる人も出てくることに眉をひそめて、「軒先の線から外には出さない。目立つ看板は取り下げたらう。そんな指導もしてるんですけど、なかなか」という。観光化の害毒にもぬかりなく、厳しい眼を注いでいる。

この店で、この店の保存改修工事をした大工の阿部政敏さんと、蕎麦を食べながら会った。見てくれだけでなく、以後百年以上持たせる仕事をしたことを、言葉少なに話してくれる。

蕎麦は格別に旨かった。町で開発したパイ



左/大内宿「結いの会」会長、そば処「米屋」主人の吉村徳男さん。「自分が美味しいそばを食べたいから」と、地元産のそばをその日に製粉して手打ちする。中/棟梁・阿部正敏さん。大内生まれで、大内の民家改修工事を10軒ほど手がけている。建築会社を経営しており「民家は手を入れれば最高の家に甦る」と言う。右/吉田桂二さん

ロットファームでつくった蕎麦だという。その土地ならではの蕎麦の香りがした。「ほんまもん」というNHKの連ドラが脳裏をよぎった。風土に根差すということは、風土の現在する、また潜在する「ほんまもん」でなければならぬ、ということであろう。

町並みをなす茅葺き屋根は、見事に単調に居並んでいる。家の平面形は単純な矩形で、これに大きな奇棟屋根が架かっている。この種の民家形式を直家と呼ぶが、民家形式としてはごく一般的だ。強いていうなら、日本の太平洋側に多く見られる。

昨日行った館岩村と大内とは、ほんのひと山、ふた山越えただけのところなのに、日本海側と太平洋側の接点がここにあるようだ。雪の量が山一つ越えることに違ってくる、そんな微妙な風土の違いが、民家の形に凝縮している。

「湯口屋」旅館、囲炉裏のある
食堂と料理一例



茅葺きの宿、囲炉裏を囲んで手料理三昧
岩瀬湯本温泉（天栄村）

宿泊したのは270年の歴史を持つ茅葺きの湯宿、岩瀬湯本温泉「湯口屋旅館」。大内宿（下郷町）と館岩村を結ぶ国道118号を東方面に入り、太平洋と日本海を分ける分水嶺に当たる緑の谷、鳳坂峠を越えると湯本温泉の集落がある。1200年の歴史を誇る



女将、星真紀子さんは「親が郵便局をやっていたので、その建物を改装して客間の一部に繋いだ他は昔のまま、物心ついたときから変わっていません。古い日本家屋は本当に丈夫で、磨けば磨くほどその良さが感じられますね。問題があるとしたら茅葺き屋根の葺き替え。大内宿の職人さんをお願いして

いるので、民家の欠点である寒さは全くない。やや温めの塩化物泉の湯も、伝統あるくつろぎの宿に相応しく、ゆっくり入浴して出ると体がぼかぼか。いまだ玄關脇に浴場があるのは珍しいが、源泉を生かして宿を造った先人たちの建物をいまでも継承しているため。大黒柱の下に源泉があるのだという。

で、女将さんら自慢の料理に舌づつみ。きのこ、山菜、自然蕎麦、岩魚や海老などの炭火焼き。そして地元の美味しい日本酒に岩魚の骨酒や濁り酒も加わって、寛ぎながらいつまでも話しが弾んだ。「辺鄙なところにある古い宿、だから料理で精一杯おもてなししたい」という女将の心意気を反映した豪華な膳だ。客室は本格的な書院造りで暖房も完備して

「全国五名湯の一つで、湯本にある三つの宿は江戸時代からの茅葺き民家を手入れしながら旅館業を営んできた。その湯元にあるのが湯口屋。磨き込まれた玄關の階段を上がると、吹き抜けの居間がある。漆喰の壁と黒光りする柱、障子や暖炉、民具等が懐かしい田舎へ帰ってきた心地。夕食は囲炉裏で赤々と燃える炭火を囲んで、

問い合わせ先
館岩村企画観光課 ☎0341-78-3330
大内宿（下郷町観光協会） ☎0241-68-2920
湯口屋旅館 ☎0248-84-2001
民宿離騒館 ☎0241-78-2338

吉田桂二氏
1930年、岐阜県に生まれる。建築家。東京美術学校（現・東京芸術大学）建築科を卒業。連合設計社市谷建築事務所を主宰。元東京芸術大学客員教授。2000軒以上の住宅を手がけ、「住み手に学ぶ」が信条。日本住宅建築の第一人者として活躍中である。一級建築士。全国町並み保存連盟顧問。
著書には『住みよい間取り』（主婦と生活社）『なつかしい町並みの旅』（新潮社）『からだによい家100の知恵』『図解・住まいの収納100の知恵』『納得の間取り日本人の知恵袋』（以上講談社）『民家に学ぶづくり』（平凡社）などがある。



四、五年に一回は葺き替えています。400〜500万円かかります。昔は火を焚いていたので20年は持ちましたが、火を焚かないと茅が蒸れて痛みやすくなり害虫もわきます。たまに天井を外して薪でいぶすといひんでしょうが、客商売ではそうもいきません」と語っていた。（浅井登美子）
カメラ/小林 恵

湯口屋旅館外観（上）と玄關脇きロビーへの階段



ベンガラと銅山で栄えた豪商たちの街 備中・吹屋ふるさと村 (岡山県成羽町)

赤味を帯びたベンガラ格子戸と鉄の飾り金具を施した縁ふち。赤銅色の鶯うぐいすの波が美しい石州瓦と薄紅色のベンガラ壁、そして妻入の切型や平入型の家の屋根に紋入りの鬼瓦等…。吹屋の民家は、銅山とベンガラ製造で富をなした商人たちの暮らした、備中一番の活気ある商町であったことが偲ばれる華麗で豪華な街なみ。中町の「吹屋ふるさと村」の周辺には、広兼家、西江家等の富豪達の城砦とも呼べるような幕末時代からの豪邸もあり、町のかつての繁栄ぶりを彷彿とさせる。

西国一の銅の集散地とベンガラ製造地 備中「吹屋往来」の拠点

備中吹屋(川上郡成羽町)は、岡山県の中西部、標高500mの吉備高原の中にある、備後(広島県)の東城から新見を経て成羽へ向かう「吹屋往来」と言われた銅の集散地だった。

吹屋の銅山の歴史は古く、天文年間(1532~1554)に地元の大塚氏と松浦氏が銅山稼ぎをしたと記されている。近世までは大塚氏を中心に村人が手伝って野天掘りをしてきたが、のちに備中代官の提案で吉岡銅山と名乗って、地元以外の銅山師も入村して短期投資的な稼ぎが行われた。1700年頃には幕府が豪商泉屋吉左衛門(後の住友の祖先)に請け負わせたが、泉屋は20年程で退去、幕末までは再び地元の豪商大塚氏らが稼業。明治以

降は三菱が操業して近代的な鉱山経営をし、大正5年には1300人の従業員を有したが、昭和47年に銅山としての歴史を閉じた。明治中頃の千枚から下谷地区の約1.5キロには180軒、白石地区にも50軒近い家が建ち並んでいたが、これらは坑夫長屋や居酒屋などで、閉山とともに大半が姿を消していった。

それに反して、国指定重要伝統的建造物群保存地区になっている町の中心部・中町は、地元のベンガラ豪商たちによって形成された町並み。吹屋のもう一つの顔がベンガラの製造販売だったことが、町並みの特色になっている。

ベンガラとは、酸化第二鉄を主成分にした赤色の顔料で、日本でも古墳時代から埴輪や壁画に使われていたが、インドのベンガル地方から輸入されてから「ベンガラ」と呼ばれるようになった。絵具、染織、陶磁器、漆器等の顔料の他に、防腐や防錆用として建築木材に珍重され、吹屋の民家はそれを色濃く反映している。

吹屋のベンガラ製造は宝永4年(1707)橋本屋と森屋が偶然技



大正時代まで採掘した笹畝坑道。全長320mの軌道を一般公開 ▶ 明治42年開設の吹屋小学校。1階に屋内運動場、2階に講堂のある左右対称の洋風建築



法を発見して、素朴な製品を生産したのがはじまりで、後に吹屋の西3キロの坂本で谷本、西江氏が本山鉱山を発見、ローハ（緑礬・結晶硫酸鉄）の生産に成功した。吹屋にはベンガラ窯元が多数出来て、良質のベンガラを全国各地へ供給するようになった。ローハ製造には先述の2軒の他に庄屋広兼家も加わり、三家が代々相続して昭和初期まで続け、巨大な富を築いた。製造人としては片山、長尾、仲田、田村氏等がいて、三家と同様に巨富を蓄積し、鉄問屋や米屋、造り酒屋、醤油製造等も兼業したという。備中はもとより全国へ名を轟かせた吹屋だったが、戦後は製鉄所で発生する水酸化鉄や塩化鉄を原料とした近代化製法に押されて衰退し、昭和40年代にはほぼ操業を終了することになる。

ベンガラ家業は辞めたが 家だけは大切に守っていききたい

吹屋の町並みは、これらのベンガラ豪商達によって江戸後期から明治時代にかけて形成されたもので、いま残る代表的な町家13軒のうちベンガラ関係の家が10軒を占めている。大半が片山（胡屋）、長尾屋、田村（福岡屋）系の家元。中町の他に千枚地区があるが、千枚地区は二度の大火で町並みとしては疎らとなり、山内家を一部改修した吹屋唯一の民宿「吹屋山荘」、銅山師大塚家、油商小川家、旧町役場等が残っている。

中町は山内家から右方向に約200mほど続く町並みで、繁栄を極めた豪商たちの広大で威容を誇る家々は、雪国や東北の茅葺き民家と比べて華やかで明るい。

昭和50年に岡山県の「ふるさと村」に指定され、さらに55年に岡山県第1号の国指定重要伝統的建造物群保存地区になった。

現在ふるさと村の村長を務めるのは、喫茶

店と薬局を営む長尾有子さん。ベンガラ豪商の一つ、本長尾「長尾屋」で1700年代の建物。低い切妻の妻入り形式の家は全体に棟高が低く、一階の天井も低いが、ナマコ壁の窓上部の七宝模様や木格子、ムシコ窓等が華麗で、300年余の歳月を感じさせない堅牢な家。鉄の問屋、銅山、ベンガラ生産、酒屋まで営んだ豪商で、先代当主長尾隆氏が大阪や東京へ出張する時は一流旅館や料亭で豪遊したが、やがて事業に失敗した一族の影響を受け、戦後は吹屋に帰り、ベンガラ史の研究、町並み保存に力を入れ、初代ふるさと村村長になった。その長女が有子さん。

「私の家は、古くはコワ葺きだったんですが石州瓦に変えたこと、幕末の頃左側に長屋門を造り、当時武家へ養子に入った長男が里帰りした時の新座敷を用意したと言われています。他は昔のまま、父は建て直しをせず、古いものを手入れしながら守っていくことを他の家の人達にも熱心に訴えていました。家はひのき材が中心ですが、ベンガラを塗って防腐しているので大変丈夫です」

ベンガラを生そのままかススと混ぜて木部へ塗る仕上げは、表面を保護し汚れ隠しの役目もするらしい。ススの混ぜ方で赤から黒に近いものまで色調に変化が出て、木目の美しさを引き出すという。そのため格子や外壁はもとより、柱や梁、床や天井にもベンガラを塗り（落ち着いた黒っぽい赤色が吹屋の傾向）、その上に漆をかけた上等な仕上げもある。

吹屋ふるさと村について、有子さんは「村全体では150軒ありますが、民宿や土産店をしているのは20〜30軒程度で、家主がたまたま帰ってきて戸を開ける家、私のところのように子供達が出ていって年寄りが一人で暮らしている家もあります。この中町の42戸は国の保存地区に指定されているため改装には

90%を国（町）が出してくれまので大助かりしています。住人には代々家業を継いできたという意識があるので、せめて家だけは大切に守ってほしいという気持ちがある地区より強いと思います」と言う。

古い家の中で煎れてくれたコーヒ―は格別に美味しかった。

向かいの家では仲田屋の主人恒彦さんが、農機具の手入れをしている。父親の代までは

▲ベンガラを混ぜた壁と石州瓦の屋根
ベンガラを塗った格子（右）
現ふるさと村村長の長尾有子さん（左）





広兼家。徳川末期建てられた主屋・楼門、石垣
 ◀母家・玄関から4つの座敷を望む



ベンガラ業を150年間営んできたというだけに大きな家と蔵がその繁栄を偲ばせる。「私は化学薬品会社へ勤めるサラリーマンになりましたが、出来ることなら先祖の築いたベンガラを再び復活したいと思うことがありますね」と語っていた。

観光客も少なく土産店も静かに営業している。石州瓦やベンガラ格子の赤味系の色が街全体を華やかに明るくし、時代劇のセットの中に迷い込んだような気分であった。

映画「八つ墓村」の
 ロケ地になった広兼家

城砦と呼ぶのが相応しいような壮大な石垣が山麓を征し、その上に櫓門、母家、離れ座敷等の建物が横長く建っている。下から見上げるだけで、その偉観に度肝を抜かれ、ロー八製造で得た富が如何に巨大であったかに驚嘆する。

旧中野村の大庄屋であった広兼家は、ベンガラの原料硫化鉄鉱の発掘とロー八製造を独占的に手がけた。母家は文化7年(1810)の建造、最も新しい離れ座敷は大正時代の建物といわれる。石塀の中には手入れされた各種の古木や庭園があり、各部屋からは緑や光りが望めるように工夫してある。水神を祀った水汲み場、広い土間の大きな竈三個と大



▶ 広兼家の台所

釜、土間を上がると囲炉裏。その奥は四列八間取りの座敷が並び、その眺めは壮観だ。しかし全体的に簡素で質素で、昔の人達の地味でモノを大切にしながら暮らす生活ぶりが見えるようだ。離れ座敷は茶室付で庭園を眺めながら回廊でつながっている。当主の結婚披露に建築されたというが、以来一度も使われていないとか。

横溝正史原作の映画『八つ墓村』で、いまだきこんなに古くて立派な家があるのかと驚いたが、広兼家でロケたときいて納得できる。しかし大勢の人が暮らしていた時はいいが、家族数人になったら維持管理は大変で、夜の静寂が身に凍みたのではないかと思う。現在は家屋敷は県に寄贈され、一般公開されている。

一方の大富豪・西江家は成羽町の北西部にあり、昼なお暗い坂道を登ると一挙に視界が開けて豪邸が現われる。幕府の御用山、本山鉾山を経営して信頼も厚く、火事盗賊や山法等の裁きを行う権限を与えられていた。寺院並みの母家と蔵群、手入れされた庭園が見事である。文・浅井登美子/カメラ・小林恵

問い合わせ / 成羽町観光協会
 ☎0866-29-2222

海辺の斜面に暮らす漁民の生活史をいまに 西海町（愛媛県）外泊・石垣の集落

空に向かう家並みと段々畑。そこには斜面を活かすために人々が

営々と積み上げた石垣がある。石垣は海からの季節風から家屋敷を守り、農作物をつくる畑を生んだ。住民が自力で積み上げたという石垣は、100年の歴史を経て、確かな石工技術と天然石の素材が生かされ、芸術作品を見るように美しい。

黒潮の天然良港は季節風の通過するところ

西海町は愛媛県の西南端に位置し、宇和海に突き出した半島状の町。気候は温暖多雨、黒潮の影響を受けて水温も高いために良好な天然漁港だが、反面、夏は台風、冬は季節風の通過地点となり、外泊のような石垣集落が形成された。

私達は九州の佐伯市で豊後水道の特産である「関アジ・関サバ」の刺身に舌鼓みし、翌朝5時30分に四国・宿毛市へ向かうフェリーに乗った。黒潮の道、豊後水道を横切って荒々しい海を越えていく2時間半の船旅。

四国が近づくと朝日の中に鳥が翼を広げたような西海町の島影が見えてきた。小高い山々が連なり海岸は急斜面になるリアス式海岸で、かつてはマグロやカジキ、カツオ等が押し寄せて海が青々とうねったという。いまは穏やかな入江を中心に真珠母貝、タイ、ハマチ等の養殖漁業が盛んになっている。人口は3400人、3分の1が漁業・水産業に従事している。

漁港に近い中泊地区で、最初の巨大な石垣に出会った。その地区の名主、中泊本家が敷地を造成して石垣を築き、石垣の中に石どうろうを組み込んだもので、灯明をともし榎石が中央にある。高さ約

5mの幾何学模様に積み上げた石垣で、その上に地域の人々に最も敬愛されてきた清岳寺が建っている。

住職の吉田弘定さんと石垣のすぐ下で食堂を営んでいる吉田イシヨさんが、石垣についた雑草取りと道路の清掃をしている。

「中泊地区が開拓されて300年、石垣はその後もなく築かれたもので、慶応二年丙寅政吉辰と記されています。何度か崩れたことがあったため内側をさらに石組みで固め二重組みにしてあります。いまは何があっても大丈夫です」と弘定さん。

「昔は石垣のところまで海になっていたため、明かりを灯して漁船を水害から守ったんです。身内のように大切なものです」とイシヨさん。80歳で独りで「食堂やまと」を開業、松山にいる息子が来るように言ってくるが、



▶外泊地区から海を望む
◀真ん中を川が流れる中心部の道路



◀中泊地区の巨大な石垣。下は清岳寺住職の吉田弘定さんと吉田イシヨさん





ここを離れる気はないと語っていた。

集落の住民が参加して石組み
家と畑のある造成地
外泊・石垣の集落

中泊から歩いて数分、静かな湾の一角に外泊地区の石垣集落が現われた。石畳の道路が小さな川をはさんで両側にあり、その左右に石垣を高く張り巡らした家々が立ち、それが天に届くばかりに並んでいる。東には美しい海、裏側には防風林を兼ねた鬱蒼とした林があり、斜面に建つ家は何処からでも海が見える。

どの家も海に面した窓を作って炊事場にし、出船と入り船をいつも見ながら炊事したといわれるが、残念ながら家の多くは改築されてしまい、民家として保存されているものは殆どない。

外泊の石垣は、天保元年生まれの喜一郎という人が、次男や村の男衆に呼びかけて造成したのがはじまりで、中泊の本家や人々に励まされながら総勢男160人、女93人、世帯数17戸が石垣作りに参加したという。工法は二三日、四目積みといわれる世間に多い手法ではなく素人的技術だったが、お互いに技を競いあいプロの石工に負けない完成度の高いものになった。名の残っているものに、18歳の青年七蔵の積み上げた石垣がある。

三条の縦道と五条の横道を主にして一區画4軒を造成、籠で自分の土地を定めたという。敷地内には家庭菜園ができる小さなスペースもあり、家で食べる野菜程度は確保できる。石垣作りは崩れた石の補給も含めて明治時代以降も続けられ、裏山を開いて畑の開拓も進められたが、今は大半が雑草に覆われている。地域の真ん中に山からの水が流れる川があり、住民の貴重な水源だったが、町では昭和

47年に上水道設置に伴い川を整備して、コンクリートの水溝にした。併せて両側のメイソ道路も、昔の石畳を生かしながら老人でも歩きやすいようにアスファルトで固めてフェンスで囲った。

かなり急な坂道だが、80すぎというおばあさんが軽やかに道を下ってきた。

「足腰が丈夫だから皆長寿だよ。これから地藏さんにお参りして友達と会おうの」と言う。地藏を祀った小さな建物は外泊集落の入口にあり、お年寄りの交流の場になっている。

中程のところで民宿「石垣荘」を営む吉田トヨカさん(75)の家を訪ねた。昭和51年の台風被害を機に、古い家と蔵を手入れして保全しながら、海側に民宿客用に広い窓のある居間と食堂を設けた。窓から眺める石垣の家々とその先に広がる海の美しいこと。空には何と鷹も旋回している。

しかし石垣の里へ嫁いできて以来、ここは世界一と愛してきたトヨカさんだが、現在の様変りには不安や不満もある。

「昔は山のてっぺんまで石垣を組んで耕していたの。皆漁師だけれど、野菜は山の畑で作って充分間に合った。でもいまは耕さなくなり、畑は山に戻り、猪や猿が出るようになり困っています。川を整備したから水害の心配がなくなったというけれど、猪が草を倒して道を塞ぐと、そこに山からの湧き水がたまり、とんでもない場所から水が落ちてくるようになりよった。家も民宿を始めてから手が回らず、野菜づくりは止めてしまった。でも息子が折りをみて山や畑に入って草刈りをしてい



▶ 祠の神様には花や菓子がお供えされている(外泊)

民宿「石垣荘」を営む吉田トヨカさん（右）と山林や空地の草刈りをする清一さん



ます」
その日も長男清一さん（40）が斜面の草刈りをしてきた。「手入れすれば猪も猿も出ないようになります。石垣を組んできた先人たちの努力と貴重な文化財をしっかりと残してい

く必要があります」と近所の主婦と作業。42戸の集落だが、住人は高齢化し、若い人は勤め等に出るので、集落の環境保全活動がいま一歩のようだ。
「私がここへ嫁いできた時は、家の前に川の溜まり場があるので皆からトヨカさはいい家へ嫁いだとつらやましがられたのよ。自然の大けい石がごろごろある川で、飲み水にも洗濯にも使い、川をはさんで洗濯物を干して皆でお喋りを楽しんだの。でも水の確保が出来ない家や時期もあり、下から水桶を担いで上がるのは女や子供の仕事で、大変でした」

「石垣の里」として保全を

町が川や道路を整備してくれた時、トヨカさんは「昔のものは残さなにかん。ここから上は昔のままにしておくれ」と頼み、コンクリートを使用しようとする工事人と喧嘩を繰り返したという。住民たちにも石垣が邪魔で現代生活にそぐわないという声があつたが、外部からきた旅行者や文化財関係者から貴重な文化遺産だと注目されるようになり、保存の機運が強まった。
「忘れもしない、外人の画家がきて毎日スケッチしている。スポンがほころんでいるので縫ってやると言ったら、涼しいからかまわな」と笑っていた」とトヨカさんの話は尽きない。

最近、この山と海が鷲や鷹等猛禽類の貴重な生息地としても注目され、それを目当てに訪ねてくる客もいるようだ。

地区内を歩くと、人ひとりがやっと歩けるような小石を敷きつめた道が縦横に走っていて、集落を造成した先人たちの理想郷づくりへの夢と努力の跡が偲ばれる。

石垣の中には小さな祠も作られていて、花や菓子などが供えられている。石垣は現代生



外泊では猫たちもおっとりとして人なつっこい

活に不向きだという声もある一方で、大半の住民は、石垣の里をこよなく愛し、誇りに思つて暮らしているのだらう。

この外泊の石垣の里は、県の保存指定を受けており、町も「文化の里・石垣のふるさと」として保存に力を入れている。そのため地区内の主要道路は歩きやすく石垣崩れ防止策を講じているが、小さな崩れは続いているらしい。個人の敷地内の石垣補修と、窓や屋根等の住宅の保全をどこまで町が助成し、石垣の里として統一観のある街並みを形成しているのか、今後への課題も多い。

交通の便も悪く、町もPRにはそれほど力を入れていないため、訪れる観光客は少ない。土産品を売る店はなくてもいいが、ちょっと休憩したり情報を得る場所は欲しい。

問い合わせ

西海町役場 ☎ 0895 82 1111

民宿「石垣荘」 ☎ 0895 82 0421

文・浅井登美子/カメラ・小林 恵



飛騨山地・暮らしと収納の知恵 種蔵板倉「の里」 (岐阜県宮川村)



米、味噌、たまり醤油、豊、布団、きもの。雪深い山国の暮らしの貴重品たちだ。岐阜県宮川村に今も残る「板倉」と呼ばれる収納庫には、かつてこんな大切な暮らしの必需品が収められていた。山あいの斜面に点在するこの板倉の景観は、苛酷な環境の中でわずかな食料やモノを大事にし、つましく暮らしてきた集落のシンボルのように、村の民家と一体となって昔の暮らしを今に伝えている。

「魔物」としか言いようのなかつた雪

一夜にして1m以上も雪が積るといわれる豪雪地帯の宮川村。岐阜県の最北端、富山県に隣接した人口1000人余りのこの小さな村は、一年の三分の一を深い雪の中に閉じこめられる。雪が降れば男たちには雪かき、道踏み、屋根の雪降ろしと、明けても暮れても終わることのない仕事が続いていた。道具や防寒着もままならなかつた一昔前を振り返り、「雪は魔物としか言いようがなかつた」と、村の人々はいう。

その宮川村を訪ねたのは秋の終わり。東京からクルマで中央道を松本へ、そこから高山を経由し国道をさらに北上する。周囲の山々は一段と大きく深くなり、山国という言葉が実感として迫ってくる。宮川村を南北に貫く国道は「ぶり街道」と呼ばれ、かつて高山湾で獲れたぶりを牛の背に乗せ高山から松本へと運んだ道だ。

その国道を挟んでいくつかの集落が山あい



飛騨みやがわ考古民俗館に収納されている民具、生活用具
◀晩秋になるとどの家でも1年分のかぶら漬を桶一杯に漬け込む

にボツンボツンと点在する。高度を上げ、つづら折りの山道を登っていくと、斜面を切り開いたような台地にでた。種蔵の集落だ。紅葉の盛りを過ぎた山々が見渡す限りに広がったのびやかな台地に、15軒ほどの民家が寄り添うように並んでいた。

生きていくための必需品を 板倉で収納する

「板倉」と呼ばれるこの地方独特の蔵は、民家の一群からすこし離れた斜面に3棟、4棟と立ち並んでいた。各地でよく見る土蔵と違って、すべてが木材で造られている。雪からの湿気を防ぐにはこの板倉が一番よく、木材の中でも水に強いクリやカツラが使われた



▶ 石垣の上にカツラ材で造られている板倉
板倉に入って説明してくれる荒谷作憲さん



という。

板倉の中には米や味噌、たまり醤油や一年分の漬物など、そして畳やきもの、布団などの貴重品が収められた。

「雪が消えると、毎年二月ほど富山へ農

耕に行き、米5俵を買ってきたですよ。米は大変な貴重品だったから、どの家も蔵にしまっていました」

と集落に住む藤木唯男さん（75）は昔を振り返る。

畳も普段は使えないハレの日のための貴重品だった。一軒の家に畳の部屋は一部屋か二部屋。他はワラかむしろだった。結婚式や法事があると、近所中が手伝って板倉から畳を運んだという。昭和25年頃までの話だ。

「一番恐いのは火災だったから、板倉はどの家も敷地から遠ざけて建てるんです」

藤木さんの話す通り、蔵は各家の敷地から100m程離れた小高い場所に、3棟4棟とかたまっている。雪の降り積もる中、この距離を歩いて味噌や漬物を取りに行く主婦たちはどんなにか大変だったろう。

そうしてまでも守らなければならなかった程、この衣食住の品々は貴重で、そして村の暮らしは苛酷だった。

「昔は田んぼがなかったからワラ一本も大事でね、ずんべというワラ靴もなかなか履かせては貰えなかった。綿だつて貴重品だから子供は綿の布団なんかには寝かせて貰えなかったですよ。板の間にむしろを敷き、その上にボ口を敷いて寝たという子供も多かったくらいだね」

聞きながら、自分の居場所や時間が一瞬遠退いていくような錯覚に襲われる。ここは一体どこなのだろう、と。しかしそんなに大昔の話の聞いているのではなかった。75才の藤木さんが子供だった頃、たかだか60〜70年前の現実なのだ。

漬物焼いて、お昼ご飯に

同じ集落の荒谷勇さん宅では、移築してから120年が経っているという板倉が今も使



われていた。内部の壁面に紀元二千五百四拾六年築とあり、明治19年の移築と記されている。勇さんの4代前の荒谷作次郎さんが普谷という地区から買い求め、作蔵さん、作兵衛さん、そして勇さんの父である作憲さんと受け継がれてきた。

カツラ材でできた蔵は釘を一本も使っておらず、要所要所に楔がしっかりと打ち込まれた立派なもの。年月を経た風格は、風土とともに生きてきた村の人々の歴史そのものとなるかのようだ。

上 / 晩秋の種蔵地区
下右 / 飛騨みやがわ考古民俗館と研究員
小島功さん
下左 / 板倉の保存に取り組む藤木唯男さん

大根、白菜漬けが終わるとかぶら漬け。
種蔵地区の漬物名人、藤木さん（左）と荒谷さん



た美里さんの着物位しか入っていない。
「漬物なんてね、こんな所に置いたら大変ですよ。雪が積もったらここまで私、歩いて来れないもの。昔の人はどうやってこんな遠い蔵まで通ったんかね」
と荒谷家のお嫁さんの美里さんは屈託なく笑う。
荒谷家では一年分のかぶら漬けの漬け込み作業の真つ最中だった。毎年晩秋になると、村中が大きな樽いっぱいこの地方特産の真つ赤なかぶらを漬け込む。村のあちこちで水の流れる音とともに、かぶらを洗うお母さんたちの姿を目にすることができた。
「ちょっとお昼だし、うちで漬物焼いてご飯でも食べていって」と、荒谷家のおばあちゃんからお昼を誘われる。
お言葉に甘えてご馳走になったお昼は何とも素朴な美味しさに溢れたものだった。鉄板の上で白菜の漬物を焼いて食べるという食べ方は、この地方に古くから伝わるもので、冬

の寒さで凍ってしまった漬物をホウ葉に盛って佃煮で暖めたり、こんなふうには鉄板で焼いたりして、野菜の不足しがちな冬場の食卓を彩ってきた。

白川郷の旅館へ、 リサイクルされる板倉

翌日、使われなくなった板倉の解体現場を見ることができた。クリと杉でできた板倉は壁が外され、屋根と柱だけの姿になっている。古民家解体を広く手掛ける建築業の鍵谷清美さんの作業現場だ。造られた年月は定かではないが、現在の場所に移築されたのは明治3年頃。持ち主が利用しなくなったのを聞き、鍵谷さんが頼まれていた白川郷の旅館に話をもちかけた。古い旅館の趣のあるポイラー室として、板倉は再利用されることになった。

この板倉の床下でキツネのミイラが発見された。狼のようにも見えるそのミイラは、体型や頭部の表情をしっかりと残したまま、眠るように横たわっている。
「白骨化しなかったのは、板倉がいかに乾燥しているかということですよ」

と鍵谷さん。大事な衣食住の品々を変質させないという板倉の保存効果が、思わぬところで発揮されていた。
鍵谷さんの解体現場は同じ種蔵地区にもう一軒あった。こちらは大きな民家で、解体作業がすべて終わるのに一カ月を要するという大仕事だ。持ち主が富山へ移り住み無人になっていた家で、解体後は恵那郡山岡町に移され「ふるさとの家」という宿泊施設として使われる。

天井を横に貫く大きな梁や黒々とした柱が、クレーンで丁寧に外され、木材の山に積まれると、改めてその大きさと一本一本の木材の風格ある存在感に圧倒される。解体した

木材は川で洗い、磨きをかけ、防虫剤をしておけば、「移築後も2000〜3000年は持つよ」と鍵谷さんは太鼓判を押す。

先人の残してくれたものが朽ち果てることなく、再度いのちを吹き返す。このエコロジカルな営みの中で民家や板倉はどんなメッセージを現代人の我々に伝えてくれるのだろうか。

雪に閉ざされた宮川村の暮らしはつつましく質素なものだった。しかしここに住む人々は、天から与えられたこの風土から逃げることなく、知恵と工夫でそれぞれの時代を生きて抜いてきた。

そんな暮らしの集大成ともいえる生活用具が「飛騨みやがわ考古民俗館」に集められている。これらは「宮川村及び周辺地域の積雪期用具」として、全2800点が国の有形民俗文化財に指定されている。モノに溢れた現代が薄っぺらに思えるほど、人々の暮らしのしつかりとした足取りが使い込まれた桶や馬ぞり、手づくりの玩具などから伝わってくる。
「厳しく大変な暮らしだったからこそ、愛着も大きいのでしょ。住民の皆さんの理解と協力がなければこれだけの数の民具は集まらなかったでしょうね」

と考古民俗館職員の小島功さんは、貴重な収蔵品を前にいう。
他にもソバ、ヒエなどを栽培した焼畑農具や、信仰の用具、また縄文時代の土器や石器など膨大な数の出土品が、この考古民俗館には展示されている。

奥深い歴史をもったこの村に、板倉の点在する風景が溶け込んでいる。



・飛騨みやがわ考古民俗館 ☎0577-62-3251

・宮川村教育委員会 ☎0577-63-2311

文・金山淑子 / カメラ・小林 恵

◀古民家の解体作業をする鍵谷清美さん



集落の中央にある見晴らし台からの眺め
◀島のおもな見どころを40分かけてめぐる水牛車観光

沖縄・南国の伝統が凝縮した自然郷 竹富島 (沖縄県竹富町)

たけとみちやう

石垣島の沖合、船でわずか15分ほどの場所に位置する竹富島^{タケトミ}、赤い瓦屋根の上でユーモラスな表情を見せてくれるシーサー、白砂が敷き詰められた美しい小径、そして色鮮やかに咲き乱れる南国の花々。手軽な日帰り観光地としてたいへんな賑わいをもたらす竹富島だが、この島の美しさは、人びとの長年の暮らしに裏打ちされていた。

日々の努力が生んだ町並み

夕刻、石垣島へのその日の最終船が引き上げてしまうと、島は急にひっそりとする。島には十あまりの宿泊施設があるが、どれもこじんまりとした規模だ。集落の中心からぶらぶら歩いて10分あまりで夕陽の名所といわれる東棧橋へ出る。しかしここを訪れる人は意外と少ない。

朝、5時をまわった頃から、表の通りを竹ぼうきで掃き清める音がしはじめた。目がきれいに立ったあとの白い砂の道は、島人の心を映し出しているようでもあって、こちらもすがすがしさでいっぱいになる。

石垣にそって町の木イヌマキ、町の花ブルーゲンヒリア、ハイビスカスなどが植樹され、白砂とのコントラストが見事だ。星砂の海岸も住民が交代で清掃に当たっているという。

赤瓦と白壁は踏襲すること

竹富島は、総面積5・4平方キロメートル、人口270人、126世帯が暮らす小さな島だ。島全体が国立公園(環境庁指定、1972年)に指定され、集落部分については87年



家の守り神である土造りの獅子、シーサー。それぞれ異なる表情で迎えてくれる

に伝統的町並み保存地区として文化庁の指定を受けている。

定められた意章を見ると、たとえば建物の増改築・修繕にあたっては伝統的な様式を踏襲し、屋根は赤瓦を用いること、屋敷囲いはサンゴ石灰岩による従来の野面積みをすることなどが決められている。

「この素焼きの瓦は通気性に非常にすぐれているといわれ、夏は気化熱をとっていくから、自然に空冷効果を発揮してくれます。祖先の知恵を守ることが、結果として文化の保存になっているんです」



▶ 喜宝院蒐集館。上勢頭享氏が70年間にわたって収集した竹富の民具、文化資料約4000点を展示している
竹富島の朝は、島の人びとが白砂の道を掃き清めることから始まる



と、喜宝院蒐集館長上勢頭さんは言う。
シーサーは、家の守り神で、土造りの獅子。門と家のあいだにはヒンポンと呼ばれる石塀があり、これも魔除けの一つだが、台風を避ける工夫でもある。寄棟屋根の平家造りも台風に対応した先人たちの知恵だという。
集落を歩いて気がつくのは、民家に限らず浄水場や電力所、郵便局といった施設までもが同じように外観を保っていることだ。たしかにここでは違和感を感じさせるものが見あたらぬが、これには大変な努力の積み重ねがあったはずである。

観光は後からついできた

この憲章の運営にあたっていているのが、集落景観保存調整委員会の中心的人物であり、日本最南端の寺院、喜宝院の住職でもある上勢頭芳徳さん。上勢頭さんは寺院に隣接する蒐集館に民具や織物などおよそ4000点もの収蔵品を並べ、それらの管理、保護につとめている。私が訪ねたときは、大勢の観光客の前に、島の文化や展示品の説明を行っているところだった。

「祖先の文化を守るために取り組んできたことが、はからずも観光資源になって町に活気をもたらしたというところでしょうか。」

ちよつと贅沢かもしれませんが、これ以上観光の割合を大きくしたくないと思っている人も多いです」

町並み保存と観光が両立している竹富町では、ここ数年連続してUターンする若者の数が増えてきた。竹富民芸館は、竹富島に伝わる織物・ミンサー織の技術の継承と発展を目的に設立された養成機関で、ミンサー織は国の伝統工芸品に指定されている。Uターンして工房で染色・織物を研修したいという女性が増えており、織物を体験できる教室は観光

客にも人気だ。

委員会では定期的な話し合いと調査を行い、建造物のみならず、拝所や名木といった環境条件の現状把握にも務めている。

何よりも優先したいのは、あくまでも島の人々の暮らし。芸能の島、民芸の島として、竹富島が持つ本来の豊かさが、これからも多くの人びとを惹きつけていくことだろう。

問い合わせ/竹富島教育委員会
☎0980 82 2276

文・写真/斎藤四葉



集落景観保存調整委員会の中心的人物で、喜宝院の住職でもある上勢頭芳徳さん
◀上/ミンサー織工房(石垣島)。ミンサー織物は女性が「いつ世まで未永く」という思いを込めて男性へ渡した織物としても有名
下/町並み景観とマッチするように設置された水道施設





椎葉で「お屋敷」と、山村の暮らしを 守り継ぐ 那須家の人々(宮崎県椎葉村)

「秘境」といわれ、平家落人伝説で知られる九州山地の奥深い椎葉村。藩政時代には、四つの大字に一人ずつ庄屋がいた。その名残をとどめ、今も「お屋敷」と尊称で呼ばれる大きな民家を守ってきた那須家の人々。その先人の知恵と思想を守り継いだ誇りが、困難さを増している山村の暮らしを支えている。

6人姉妹が毎日30分棚磨き

谷から吹き上げる強風を防ぐためなのか、下の村道から見上げると「お屋敷」の大きな瓦屋根は、屋敷を取り囲む石垣に覆いかぶさるように見えた。間口が25mほどもある入り母屋造り。屋敷の北東側には、五葉松の太い幹から四本の枝が天を突くように伸びている。その根元に、約500年前のものといわれる古い墓石が4基。

戸口からドジ(土間)に入るとすぐ左手に、九寸角の銚色に輝くケヤキの大黒柱がある。

6人姉妹の4女として、この家で生まれ育った那須綾子さん(72)は、学校に出る頃から当然のように、総ケヤキの戸棚や大黒柱を磨いてきた。

「母から掃除の仕方は習ったとです。最初、米のぬかを鉄の釜で炒つとです。それを絹の布に包んで磨いて、そのあと絹の空布で拭いて、仕上げにもう一度絹の布で磨いて。6人姉妹皆で、やっぱ30分以上はかかったと思います。ほとんど毎日してました。ピカピ



カになるから、子どもながらにもうれしかったですよね」

宮崎県東臼杵郡椎葉村の民家は、標高500m付近に建っているものが多い。山岳地帯で斜面のため敷地は広くとれず、庭先からすぐ石垣となっている。家の構造は横に長く、梁方向に部屋割りをしている。「お屋敷」は、北東の側からコザ、デイ、ナカノマ、ウチネと部屋が続き、一番端にドジがある。コザには神棚、仏壇をまつり家の中で最も神聖な場所だ。デイは客間。ウチネが家族団らんの部屋となる。どの部屋も山の側は神棚、仏壇、戸棚で閉ざされ、採光は谷に向かって開かれた縁側からだだけだ。デイとウチネには、それぞれジロ(囲炉裏)があったが、現在、デイの

上/那須家、デイと戸棚。右手がコザ
右/夕方、両戸を閉める綾子さん





上/デイ (正面奥はナカノ間) 下/コザの仏壇

上/軒下 下/大黒柱

上/家屋 (東側から) 下/納屋と家屋敷 (南西から)

「瓦を葺いたのは昭和34年。瓦を運び込むのに、下の村道はまだなかったから、東側の石垣を崩して田んぼに板を敷いて、リヤカーで運んだんです。ちょうどその頃、美智子妃殿下が結婚された時で、自分はリヤカーに乗って、白い軍手をはめた手を振って、美智子様のお真似をして笑わせたのを覚えてますから」

この時に、ウチネとドジを改造して現在の形になった。

改造しながら「お屋敷を守る」

「お天気のいい時は、はって(反って)、雨が降ると漏るとですよ。ルーフィングをしなくても紙ですもん。地下足袋で登れば破れてですよ」

「生まれやす」とここに居つとです。こんな古い家なんかより小さい家がいいと、私しゃ言いよつたですよ。大きな家で暗いから、私しゃ、あきれたつですよ。瓦を着せる時、半分に分けて小さい家にすると言つたら、親に怒られてですよ。まだ小娘だったから、自分の便利ばかりで」

庄屋の家として古くからここに建つていた民家を、明治の中頃、綾子さんの祖父にあたる当主那須源蔵が建て替えた。山側の柱だけを残して総ヒノキ造り。デイとナカノマを仕切る板戸は杉の一枚板だ。造り酒屋をしてきた源蔵の全盛時代であった。屋根はもと茅葺き、戦時中は栗のそぎ板で葺いてあった。

ジロは半分になった。綾子さんが母から昔話を聞いたウチネのジロはなくなった。

椎葉村が椎葉山といわれた藩政時代、球磨郡人吉の相良藩統治下にあった四つの大字に、一人ずつ庄屋が置かれていた。その一つ、不田野地区の庄屋が、今でも「お屋敷」と村人から尊称でよばれる綾子さんの家だ。



24年前の彼岸に、長男の鉄郎さんが結婚した時には、この家に200人を越える招待客を迎えた。

「学校を借りるはずだったんですよ。ところが招待客が200人を越えたら貸さんといわれて。あんまり華美にならんようにちゅうことだったんですよ。間仕切を全部外して、障子も全部張り替えるし、畳も表替えをして、女は何日も前から準備で一生懸命。披露宴の料理をここで作った記憶はないから、熊本県から買って来たんですよ。式は、私の父が宮司の資格を持っていましたから、神式で。三方などの神事に必要な道具を一式買ってきて。ようこれだけの人が入るなあ、と言われました」

畳だけで55枚敷いてある。「お屋敷」の底力である。しかし現在では、雨戸を全て開けることはなくなった。日々の暮らしでコザに

◀ 山間部に集落が点在する椎葉の村



宮崎市からリターンした貴文さんと尚美さん
 シイタケの収穫作業をする尚美さん
 原木を運ぶ鉄郎さんと貴文さん



▶ 左から鉄郎さん、政登さん、綾子さん



入るのは、毎朝、仏壇に供える飯の上げ下げの時だけである。デイを使うこともない。綾子さんは、先祖から受け継いだ「お屋敷」を守り継ぐことを第一に考えているのだ。

孫もお嫁さんを連れて帰郷した

「お屋敷」を訪ねた時、上の畑に、綾子さんの孫那須貴文さん(24)と妻の尚美さん(24)が、イノシシの飼料にするサツマイモを収穫に来ていた。二人は、昨年3月に結婚したばかり。同じ不土野地区の母方の納屋を改装して新居にしている。

椎葉村民にとって解決策のない難問は、嫁の来てが少ないことだ。そこに、尚美さんが宮崎市から嫁に来て一年が過ぎた。「よそから嫁に来てくれることはないから『床の間に飾っちゃかないかん』とおばあちゃんと言っていたと聞いたけど」尚美さんは屈託がない。二人が宮崎市で知り合ったのは結婚する二年前。

「椎葉がどんな所かも知らんかったから。初めて来た時、何も無いと思った。山ばかりで家はどこにあるっちゃろかという感じ」待ち望んでいたのは、貴文さんの家族だけではなかった。

「婦人会の会長さんが来てから、生年月日なんかを聞かれたら思っていたら、そのまま婦人会に入っていた。馴れてからにしようかなと思っていたけど、椎葉は周りの人がいい。宮崎は、隣近所しかないけど、ここは地区でやさしいですね、皆」

嫁をもらって一番張り切ったのは、もちろん貴文さんだ。

「えらいね、て言われてますわ。宮崎から嫁をよう見つけてきたね。美人じゃし、て」

彼は、30年間も放置され、イノシシの餌になっていたクリ園の整備を、昨夏から始めた。若い嫁を迎えた那須家の女性たちが奮起して「あしたは」という村おこしグループを立ち上げ、クリを使った加工食品の製造販売をし

ようというのである。昨秋の「椎葉平家まつり」には、栗まんじゅうを売り出して、なかなか好評だった。

イノシシの餌にしようとしたサツマイモは、寒さで一旦凍ったために腐れていた。日暮れの早い谷間の集落だ。夕方五時を過ぎると、急に寒くなり闇が迫ってくる。

サツマイモの収穫は諦めて、足元の明るいうちに「お屋敷」の庭に降りていくと、シイタケの原木をハウスに移動していた綾子さんの夫政登さん(76)と長男の鉄郎さん(47)も帰ってきていた。

裏山の湧水をホースで引いて溜めている水槽がある納屋の前に、皆が集まって仕事で汚れた手足を洗う。そんな時に明日の仕事の段取りも決まってくるのである。翌日は、貴文さんもシイタケの原木を運ぶの手伝うことになった。父子孫の三代で、同じ仕事をする。羨ましい話だ。

50センチ角はあると思える納屋の柱に見入っていると、綾子さんが教えてくれた。

「納屋の柱はモミの木と聞きましたが、源蔵じいさんの前からあるそうです。もう何百年経つか分かんなくてすよ」

親子三代、椎葉の 農林業の振興に取り組み

翌日は曇り空だった。鉄郎さんが空を見上げて心配顔である。

「雨の日に、原木を車に積んだり動かししたりしたら、シイタケの菌に刺激を与えることになるでしょう。そうすると、次の年も同じ刺激を与えてやらんと、もつ芽が出らんとです。水をかけるとか、シケ打ち といって金槌で原木の木口を叩くとです。じゃから雨の日は刺激を与えんようにすつとですよ」

谷をひとつ隔てた山にあるクヌギの林に秋



から準備していた原木が寝かせてあった。鉄郎さんと貴文さんが、ほとんど打ち合わせをすることもなく、それらを軽トラに次々と積み込んでいく。尚美さんは近くで、すでに芽が出て育っているシイタケを収穫。このまま置いておけば寒さにやられてしまうからだ。ピニールハウスに移動するのは、寒さから守るためにと水分管理のためである。

椎葉村の主な産業は、畜産とシイタケ、それに林業である。どれもここ数年、価格の低迷が続いている。しかし、嘆いてばかりはおれない。こういう時こそ伝統的な産業や文化を見直そうと様々な試みがなされている。

椎葉村には、伝統的焼畑農業を継承してきた椎葉秀行さん（77）がいる。親の世代には

馴染み深いこの伝統的焼畑を、子どもたちに伝えようという行事もその一つだ。

晴天の続いた昨年夏。約0・2haのヤボ（木を伐採した山地）は、カラカラに乾燥していた。尾向小と不土野小が主催する「子ども焼畑体験学習」に参加した小中学生58人のうち小学5・6年生が、急斜面になっているヤボの上部と両側から火を入れた。杉の枯れ枝が一気に燃え上がる。正面からさすような熱気が襲ってきた。種火のたいまつを持った小学生が顔を背けるように逃げ出す。「とけるとける、顔面がとける」

火入れをする前、伝承されてきた神事を行い、唱え言も唱和した。

「このヤボに火を入れ申す。へび、ワクドウ（カエル）、ムシケラども早々に立ち退きたまえ……」

ヤボは2時間足らずで完全に焼け、ソバの種を子どもたち全員でふりまいた。

翌日開催された焼畑シンポジウムで、「椎葉の焼畑は数年間作物を栽培し再び森林に戻す。『神様に土地を借りる』という考え方があるからだ」と先人の思想を学んだ。

椎葉村には、「お屋敷」の他、国指定重要文化財となっている代表的な民家に「鶴富屋敷」がある。その他にも古い民家は皆、同じ構造で同じ間取りである。急な斜面の山間地、九州といえども厳しい冬の気候、風の強い地形。これらの困難から暮らしを守る先人の知恵が活きている。

時代は変わっても、気候風土の困難さを選べることはできない。その時、先人の知恵と思想と情熱のかたまりである「お屋敷」や「焼畑」を守り継いできた自信と誇りが、山村の厳しい暮らしを支えてくれることだろう。失礼しようと庭に出ると、寒風の中、小雪がちらついていた。産毛をまとったモクレン

の新芽が春を迎える準備を整えている。見送りに出てくれた綾子さんが声を弾ませた。「あれが一番早いですね、花は。あのままどんなに雪が降っても大丈夫です」

椎葉村役場 ☎ 0982 67 3111

文・写真/芥川 仁

各地の保存民家



ブナ材で建てられた堅固な農家・旧佐藤家（新潟県守門村）

佐藤家住宅は1738年（元文3年）に建てられた農家で、中門造りの初期の遺例として、昭和52年に国の重要文化財の指定を受けた。建築面積は約150平方メートルと小さめだが、幕末から明治初期にかけては寺子屋風に使われた時期があったといわれ、どこかほのぼのとした懐かしさを感じさせる。

建材は、大半がブナ材で、ブナ材の使用は全国でも珍しい。太い柱、屋根を支える小屋組みなど豪雪に耐えられる堅固な構造だ。主屋は寄せ棟造り、中門は入り母屋造りのかやぶきになっており、正門入り口には、うまやがある。隣接する家では佐藤家の人々が暮らしている。

関越道小出ICから車で30分、またはJR越後須原駅から車で5分。見学資料代100円。問い合わせ先は守門村教育委員会 ☎ 0257 97 2311



木曾十一宿の北から二番目、なかせんどう中山道最大の難所といわれた鳥居峠を南に控え、「奈良井千軒」と呼ばれるほどの賑わいをみせた奈良井宿。南から上町、中町、下町しもまちの三地区に分かれた約1kmの家並みは宿場町特有の風情を保ちながら、旅籠や庄屋、本陣、問屋の町、木地師や漆師、櫛細工師ら職人の町としての特色がいまも活かされており、木と生活の臭いがある。裏山の燃えるような紅葉と、町の脇を静かに流れる晩秋の奈良井川が一層風情と彩りを添えていた。

木曾の伝統文化と木工職人の民家町

中山道・奈良井宿（長野県ならかわむら榑川村）



列車で来てゆったり散策

木曾谷は古来交通の要衝として栄え、江戸時代には江戸と京を結ぶ中山道は五街道の一つとして賑わっていた。明治以降は、中山道は国道19号となり、狭い谷間には鉄道（中央西線）も開通したが、交通の要衝であることに変わりはない。

奈良井宿の中心地、中町へはJR奈良井駅から徒歩5分の距離にある。JRが「ミステリー奈良井宿」としてPRしたこともあって、私達が取材に行った日は平日にもかかわらず女性や中年夫婦の観光客で賑わっている。奈良井宿の南方には、古い

民家と町並みで有名な妻籠宿、馬籠宿まごめがあり、民家による観光先進地であるが、JRの駅から遠いためツアー客が観光バスでやってくるケースも多い。バスを降りて急いで見学してセカセカと次の場所へ移動していくという悪しき旅行パターンも見られ、関係者を嘆かせている。

その点奈良井宿は、紅葉の美しい木曾谷を車窓で楽しみ、下車したあとはゆっくり歩いて民家を

見学したり土産品を買ったりして散策を楽しむ人々の姿が多い。重要伝統的建造物群保存地区という立場からも、団体客がドカドカとやってくる観光化だけは避けてほしい。

昼食で賑わっているのは、「徳利屋」という蕎麦処。広い土間で履物を脱いで上がると、囲炉裏には薪が赤々燃え、襖をはずした古い座敷が食堂。吹き抜けの居間の柱や梁は杉の古木で黒々と光っている。昔この家は高遠藩



蕎麦処「徳利屋」の囲炉裏で、愛知県から来た観光客 右/女将・原なをりさん





の御用商人として米問屋を営んでいたそう
で、2階にも左右に畳の部屋が幾つもある。
現在蕎麦店を経営しているのは原なをりさ
んとご主人の文登さん。「古い大きな家は住
みにくいと、早くに家を出て松本の方で福祉
関係の仕事に従事していましたが、両親が亡
くなってからは空き家にしておくのが忍びな
く帰ってきました。手入れして磨いて使うと
生き返ってきます」
ご主人は漆絵師が本業だが、いまは蕎麦打
ち名人として多忙だ。
宿場の街道は狭いところもあるが、総じて
道幅が広く、ここで荷づけ馬の荷捌きをした
のだから。中町と上町の境には「鍵の手」が
あり、曲がり鼻に水場がある。奈良井宿には
このような水場が数カ所あり、山から流れ出

た清水は宿や馬の大切な飲用水だった。
中町には旅籠屋も多い。民家の特徴として
は、客を2階に泊めるため2階は立ちが高く、
屋根は板葺きで、1階のひさしより外にでて
いる。これを出梁造りという。また奈良井宿
の民家の特徴的な意匠に「猿頭」がある。厚
板を段重ねし、段にした部分を丸い突起にし
て削り込んでいるのが猿と頭の行列にみえる
のだという。が、実際は頭を支える機状の面
の取り方の「猿顔面」に由来するらしい。板
葺きの屋根は軽やかで重圧感がなく、また黒
くて密度の高い格子「千本格子」には白い障
子（いまはその外にガラス戸を入れている）
がよく似合っている。通りに面して設けられ
た2階座敷は思ったより大変明るく、寒い冬
も暖かい。どの家も手入れをしながら客人を
迎える場所になっている。

民家を活かしてアート感覚の
ショップに「花筏」

民家の土間と居間を活かして地元の工芸作
家達の作品や伝統物産、趣味の小物などを展
示販売している店がある。経営しているのは
高谷すみ子さん。25年前にこの家に嫁いでき
て、13年間脳卒中で倒れた義父の介護をし看
取った。

「6年前、さて何をしようかなと思ひ、2階
から古いちゃぶ台を下ろしてきて、そこに私
の関心のあるお気に入りのモノを置いてみま
した。奈良井は漆工芸の町、私も嫁いできて
3年後に漆工芸高等学校の夜間部に5年間通
いました。漆はハレの器という印象が強く、
普段の生活で愛用している人が減ってきてお
り、一般店で売っているものも技巧過多気味
で現代生活にはちょっと不向き。この地方の
工芸作家や伝統職人さんの納得のいく漆器を
紹介したいと店をオープンしました。皆さん



土産店が軒を並べる中町はずれ

が作品を持ち寄ってくれたので資本金はゼ
ロ、若い作家の作品も展示しています」
他にも、木曾地方の山間部で織られてきた
紬とその風合いをいかして特注した麻や木綿
のお洒落着、陶芸品、木工品、和紙の小物な
ど、すみさんのアート感覚を活かした商品
が並び、伝統のなかに現代感覚をもつ夢に溢
れた店になっている。

家の改修は居間をフローリングにした程度
とか。照明を上手に使って商品をライトアップ、
古い家だからかえって効果的になっている。
土産品としては漆器は高価だが、「一つあ
ると豊かな気持ちになれる一品」にふれて、
木曾の工芸品の素晴らしさを知ってほしいと
すみ子さん。訪れる人の少ない雪の日も、
明々とライトアップして、街の賑わいを絶や
さないように気配りしている。

棟梁・酒井英雄さんの工房（右）
下ノ自宅2階に作られた採光用ガラス
屋根とガラス張りの床



民家の保存再生人
棟梁・酒井さん

酒井英雄さん（60）
は2代目の棟梁、奈良
井宿の古い家の保存や
改修に取り組み25年
なる。

「ここは標高が高い（9
40m）から冬はマイ
ナス10度以上になりま
す。古い広い家に住む
つていうことは大変で
暖かく暮らすためのア
ドバイスなどもしなが
ら、民家保存の助っ人
をしてきました」

さすが棟梁の家らし
く、居間の天井には和
紙風の透きガラスを張
り自然光を取り入れて
いる。それを2階から
みると、古い母屋と増
築した子供部屋棟の間
に廊下を設け、天井と
床の一部に透きガラス
をはめて太陽光線が一
階まで注ぐ工夫をして

いた。
酒井さん宅から30mほど南へ行った上町地
区は、昔は大きな櫛問屋や櫛商人・細工師が
いた商工業の町で、櫛問屋の中村屋が昭和40
年中頃に村外へ移築されようとした時、住民
の保存運動が起きたところ。中村屋は資料館
として保存され、奈良井宿は国の重要伝統的
建造物群保存地区指定の制度が発足すると
も昭和53年に選定を受けた。村では昭和62

年から4年かけて町なかの電柱を移設した。
民家保存の場合、屋根、壁、格子の補強等
の外回りは全て補助金が出るようになった。

「80%は保存されてきましたが、そこに住んで
いないと傷みやすいので、私が時々出掛けて
戸を開ける家もあります。木曾は江戸時代か
ら幕府の御領地でスギ・ヒノキの巨木が多か
った。一番丈夫な木はクリだが、皆切ってし
まい、今は手に入れるのが大変です。屋根の
板葺きには杉の間伐材が使えるので、茅葺き
と違って手に入りやすいが、土台を補強して
格子を塗り直して（黒っぽい茶色の防腐材で、
深茶と呼んでいる）、平均400〜500万
円はかかります」と酒井さん。

家の近くに工房があり、そこには改修や再
生を待つ木戸や格子、補強用の各種板がうず
高く持ち込まれていた。

「昔の大工はトチ、モミ、カツラなどの材を
生かして家や調度品を作った。しかしクリな
どの雑木林も戦中戦後に薪として使われて丸
坊主になり、代わって植林されたのがカラ松。
寒い地区でも育って美しい森となるが、木材
としては全く活用できない木です。多様な落
葉樹の森を再生していくことが、民家の保存
や伝統工芸を継承していくためにもいま一番
大切だと思っています」と語っていた。

なお、上町、中町、下町から成る奈良井宿
と共にぜひ訪ねたいのが木曾路の北の入口
鬘川の宿。木曾路の第一の宿場だった面影は
ないが、復元した番所があり、木曾考古資料
も豊富。

続いて立ち寄ってみたいのが平沢地区。木
曾漆器の産地で、いまま数百余年の伝統を誇
る漆器店が軒を並べている。商家として凝っ
た造りが多く、近くには木曾の工芸品を一堂
に集めて展示販売する「木曾くらし工芸館」
もある。



平成8年に竣工した鬘川小学校の木造校舎



平沢地区の、漆器店が軒を連ねる家並み

信濃川の水源地になる奈良井川のほとり
は総ヒノキ造りのお洒落な建物が目を引い
た。樽川小学校、鬘川小学校で、共に木工
の町にふさわしく木の香いっぴいの新校舎に改
修、現存154名の児童が学んでいる。

・樽川村教育委員会 ☎0264 34 2001
文・浅井登美子 / カメラ・小林 恵

「壊されるものが何かを語りかけてくる」 民家に学びながら解体・再生 古民家再生普及会

(福島県昭和村)



小林さんがコーディネートした会津の再生民家（福島県河東町S邸）

地域の風土と、人びとの暮らしが凝縮された日本の民家。この民家をできるかぎり再生し、今に受け継いでいこうというのが福島県昭和村で古民家再生普及会を主宰する小林政一さん（49歳）。おもに会津地方の民家の解体と、引き取り手への移築再生を手がけ、家のいのちをつなぐ仕事に奮闘している人物だ。

炉端で聞いた民話がきっかけ

昭和村に生まれた小林さん、地元の高校を卒業後は東京で写真の勉強を始めたが、1988年にUターン。実家である江戸末期の建物を、自身で宿泊施設「ペンション美女峠」として再生することから地元でのスタートを切った。古民家、古材の再利用を呼びかける情報誌の発行や解体作業をまかなう曾津古木

屋を立ち上げ、自分たちの活動を外に向けてアピールした。すべてを手作業で行いながら、これまで解体を手がけた民家は70棟を超える。

東京で写真の勉強を始めた小林さんが最初に興味を持ったのは、民家ではなく全国各地に伝わる昔話であった。テーブルコーダーを持って北海道はアイヌの村まで訪ね、老人たちから物語を集めたという。

集めた物語は、何冊かの本になってまとめられたが、ここでの収録作業が、小林さんと民家との出会いにつながった。語り部である老人たちが住んでいたのはたいがい茅葺き屋根があるような民家であったし、話はいつも囲炉裏を囲んで聞くことになったからだ。「そもそもカメラマンになろうと思ったのも、高校生の頃に新聞でみた写真がきっかけだ」



再利用を前提とした解体作業を行う小林政一さん。曾津古木屋、古民家再生普及会代表。道路拡張で移転を余儀なくされた実家を、和の趣をもつ「ペンション美女峠」として再生した（上）



たんですね。たしか一家をあげて離村していく拳家離村の様子が写されていて、つぶされた民家がすごく印象に残ったんです」
失われていくものへの執着がこのときから小林さんの中に芽生えていった。

土地によって民家の個性が変わる

小林さんが地元の民家に目を向けるようになったのは、一つの出来事がきっかけだった。80年代中頃のことである。

取り去った茅は再利用、肥料として自然に還る。
茅を取ると、屋根の骨組みがあらわになった



2001年春に行われた福島県三島町の民家解体風景



屋根の基底部である桁を外す



梁はさすがクレーンで下ろされる。解体作業もほぼ終盤だ（撮影／小林政一）

「その頃、西武デパートが合掌造りの家を売り出したんです。民家ブームの先駆けみたいなもんですね。ところが、同じ民家であっても、福島にあるような中門造りは相手にされなかった。偏った民家神話があったんだと思います」

小林さんは地元の民家をアピールしよう、と当時はまだ少なかったアウトドア関係の雑誌に記事や広告を載せてもらうことを始めた。最初のうちは、それこそ手探りの状態だったという。

「自分ももったいないなあという気持ちから始めたんです。だからやり方も自己流、誰にも教わらずに、一つ一つの家を相手に学んできたような感じですよ」

かつては馬牛とひとつ屋根の下で暮らした

な気がして、だからやめられないんです」

解体作業では、茅葺きの家は小型トラックの数10台分の茅が、屋根裏や蔵からはさまざまに暮らした道具が出てくる。藁で編み上げた靴から籠、あるいは織物の道具や農耕具など、地元の人に聞いてももはや用途不明のものも出てくる場合がある。

「こういったものを現代にどう生かして循環させていくか、を考えていきたい」と小林さん。

たとえば一軒解体すれば数百単位で出るといふ道具や材は、きれいに磨きをかけ、古民具としてデパートでの展示会などに出品することもする。

雪深い農家の民家。小林さんは庶民の暮らしを反映した会津地方の古民家に愛着を持ち、消えていくことに危機感を持った。

**茅一本、古道具一つ
無駄にしない**

家は営みのかたちによって、その姿が大きく異なると小林さんは言う。間取りの知恵から感じることもあれば、たった一本の柱の木組みから発見することもあるといふ。

「古い家は、みなそれぞれ個性的。しかも、そこにはその土地を知り尽くした人間の知恵が隠されています。壊されるものが自分何かを語りかけてくるよう

家は人生最大の買い物ではない
再生価格も安くして

現在、古民家再生普及会のメンバーは50〜60人。最近では高校生や女性の参加者も増えているそうだが、来られる人が来る、というゆるやかな構成になっている。小林さんにすれば「百人いたら、そのうちの一人でも二人でも本気になってくれればいい」のだそう。現在自らが代表として発行する新聞『ふるさと通信』『古木屋だより』も、「自分は忘れっぽい質だから書きつけているだけ」とあっさりしたものだ。

現在ペンションのオーナーであり、個人出版社「ふるさと企画」の代表者であり、そして民家再生のコーディネーター役として忙しい小林さんだが、一番大切なのは、自由な時間を確保することだとか。

今の民家ブームは、集落の景観美のためだとか自然志向だとか、どうも文化的な発想が強すぎるのではないかと小林さんは懸念する。形式美や規格では語れないところ、住む人の知恵が多く隠されているからだ。

家についても、作り手に任せっぱなしの施工が多すぎるのではないかと小林さんは言う。

「家は人生最大の買い物なんかではないし、お任せでつくってもらってもいいんです。ね。だからいつも、お客さんのやる気があるかどうかをほくは見ます。お金も多少は持つてないと困るけど（笑）、人任せのような施工じゃ民家の持ち主としては頼りない」

いまや古民家再生の雑誌などで必ず登場するといっても過言でない小林さんだが、ほかと比較して驚くのは再生単価がかなり安いことだ。坪単価はだいたい60万円。これは民家を普及させるための価格だという。



「建てることより、壊してつくり直すほうが案外難しい。それを集落なり、仲間なりに協力してやっていく、いわば現代の結を提案できるような場になればいいのではないだろうか」

小林さんは現在、「古民家解体の学校」の生徒を募集中。解体、移築再生の体験を通して、一軒の家が教えてくれるもの、その地域のもつ文化や風土を継承していく心を育ててもらえばと小林さんは考えている。

・古民家再生普及会（小林さん宅、ペンション美女峠）

☎ 0241 57 2870

取材 / 斉藤四葉



苧麻と呼ばれる植物の繊維からつくるからむし織り。昭和村だけに伝わる伝統文化である。実習を行うからむし会館
◀ 外観、内部、吹き抜け部分ともに、小林さんがコーディネートした福島県会津の再生民家



堂々とした合掌造りの民宿「かんづくり荘」
◀ 間仕切りを抜いた食事の広間は、温かい郷愁の空間



築250年の民家を宿泊・食事処に活用 都心から2時間で行けるふるさと村(東京都檜原村)

檜原村数馬は、都内で茅葺き屋根の民家が残されている数少ない地域のひとつだ。このあたりは兜造りの家が多いことで知られているが、「檜原村」の名の通り、ヒノキが豊かで、「松皮葺き」の屋根を持つ家も珍しくない。松皮葺き合掌造りの古民家を食事処として活用している「かんづくり荘」を取材した。

兜造りの民家が檜原村の顔に

JR立川駅で五日市線に乗り換え、終点の武蔵五日市駅で電車を降りる。東京の奥座敷と呼ばれる檜原村は、そこから多摩川の支流、秋川渓谷に沿って、車で30分ほど遡ったところだ。街道に面した数馬地区に、兜造りの旅館や民宿が数軒建ち並んでおり、観光の目玉の一つになっている。

檜原村は、東京の最西端に位置し、南は山梨県と神奈川県に接する。全村山に囲まれ、80%が秩父多摩甲斐国立公園。江戸時代から昭和30年代まで、村の人々は、林業、農業、養蚕、炭焼きなどで生計を立ててきた。檜原村に兜造りの家が多く残るのは、家の中で養蚕を行っていたためだ。

しかし、やがて養蚕も林業も下火になり、村を離れる人が続出。昭和初期には6000人だった村の人口は減少の一途をたどった。そんな檜原村に、戦後、一つの転機が訪れた。南秋川に沿う深谷道(現/都道・檜原街道)が開発され、昭和48年に奥多摩有料道路(現/奥多摩周遊道路)が開通すると、豊かな自然環境を求めて、首都圏から多くの観光客が訪れるようになったのである。旅館や土産物屋、食堂が次々とオープンし、茅葺き屋根の家は民宿へと様変わりした。その中の一軒が「かんづくり荘」。兜造りの民家が多いこの集落にあって、唯一の合掌造り建築だ。家の前に立つと、どっしりとした茅葺き屋

かんづくり荘の山崎源重・鈴子さんご夫妻と、父親の素重さん



根に圧倒される。厚さが1m近くある屋根は、内側が茅葺きで、外側は松皮葺き。合掌造り特有の三角屋根のフォルムも見事だ。14代目当主の山崎源重さん(44)によると、江戸中期の建物だという。

「このあたりでは、250年以上経た民家は珍しくないんですよ。でも、今、数馬地区に古い家は8軒残っているのみ。私の家以外は兜造りで、8軒のうち茅を葺いているのは4軒。あとは銅葺きやトタン屋根になってしまいました」

時代の波に翻弄されながらも、かろつじて姿を留めた8軒の民家が、今、檜原村の顔になっているとは、なんとも皮肉だ。

暮らしの知恵が生んだ合理的な建築

檜原村に伝わる兜造りは、甲州南部から入ってきた「富士系の兜造り」だという。古くは関東の平野部と甲斐の国府との交通の要衝だった檜原村には、人や物があつまり、さまざまな文化が到来した。数馬の人々は、主として甲州方面と交流したため、西原峠などを越えて物資



数馬地区の兜造りの家
上 / 蛇の湯たから荘
下 / 兜屋旅館



が運ばれ、時には花嫁もやってきたという。甲州の民家建築がこの地に根付いた背景には、「道」が大きく貢献していたわけだ。「実は、うちも元は兜造りだったんです。いつから合掌造りにしたのかわかりませんが、茅を取り除くと、名残があります」と源重さん。兜造りも合掌造りも、養蚕を行うための実用から生まれた建築様式である。生活の場と生業の場を一つにするために、屋根裏を多層にして、2〜3階に広い作業スペースを確保。そして、蚕を飼う部屋には、採光や通風のために窓がつくられた。外から見ただけではわからないが、かんづくり荘も4階建てである。かつては、1階部分に人が住み、2階は天井を低くして、温度を蓄えた。囲炉裏から立ち上る熱気をためて、蚕室を暖めておく必要があったからだ。3階は養蚕に、そして、4階の屋根裏の狭い空間を物置として利用した。今は食堂として使っている1階部分を見せてもらった。8畳、10畳、20畳の座敷が、間仕切りを抜かれ大広間になっている。民宿を

開いた際に、座敷の天井を高くし、あちらこちらに手を入れたが、黒光りする柱や梁は、昔のままで。「梁にはモミヤ松の木、大黒柱には栗の木が使われています。釘は一本も使わない構造で、柱には手斧削りがなされています」。山崎家は14代つづく旧家。昔は車の幌をつくるのを家業としていたそうで、「かんづくり荘」という名前も、ここからきている。

石臼で挽いた蕎麦が評判

民宿を始めたのは15〜16年前だという。「おふくろが始めたんです。それまでは、養蚕や林業、農作物の販売をしていたんですけどね」と源重さん。といつても、彼自身は自宅近くにある檜原温泉センター「数馬の湯」に勤め、民宿は現在、妻の鈴子さん(42)が切り盛り。父親の素重さん(70)は林業をつづけ、母親のナホ子さん(67)は蕎麦打ちを担当している。「おふくろの蕎麦は旨いですよ。なにしろ、わざわざ玄蕎麦を石臼で挽いて作るんですから」評判の手打ち蕎麦や田舎料理は、1階の食堂でいただける。古い竹まいの中で味わうおふくろの味は格別だろつ。

かんづくり荘に泊まりにくるお客さんも、そんな故郷の温かみを求めているのかもしれない。

「最近のお客さんはドライで、部屋にカギがかからないとダメだし、テレビもトイレも暖房設備もないとダメだと言っんです。実際、昔の家は夏は涼しいけど、冬は寒いですからね。だから、宿泊客のための部屋は、6〜7年前、母屋の奥に新築しました」

林業が本業だった山崎家だけあって、新館は総ケヤキ造り。6室ある部屋はすべてカギがかかり、テレビもトイレもある。山奥なの

母屋と新館を結ぶヒノキの廊下。間伐した丸太木も壁面に使用している



に、都会にいる時と変わらない快適さだ。夕食には山の幸(山菜、きのこ)と川の幸(ヤマメ)をふんだんに使った季節料理が用意される。自家製コンニャクや手打ち蕎麦も出されるときか。都会の喧騒を忘れ、手作りの旨いものを食べる。そして、夕食後のひととき、宿の人とおしゃべりを楽しんだりする。そんな気楽さ、温もりが、民宿のいいところだろつ。ちなみに、この日はナホ子さんが留守で、石臼で挽いた蕎麦が味わえなかったのが残念だった。

葺き替えに備えて松の皮をストック

ところで、茅葺き屋根は維持費がかかるというが、かんづくり荘はどのように対処しているのらろつ。

「葺き替えをすると、技術料と材料費を入れて、片側だけで1000万円近く費用がかかるんです。うちの場合は、親父が林業をしているので、松皮葺き用に木の皮をむいて保存しているんです。だから、足りない分を買っただけなので、材料費はそれほどかかっていません。それができなくなると大変です。数馬



▶素重さんがコツコツと蓄えた
 栓皮葺きの皮。
 ▲ナホ子さんが石臼で挽いてつく
 る手打ち蕎麦

かんづくり荘 ☎042-598-6063
 宿泊8000円(1泊2食付)昼食のみもOK



は重要伝統的建造物群保存地区ではありませんから、国や村から補助金は出ないですからね」
 新館の裏手にある倉庫には、一抱え分ずつに束ねた杉やヒノキの皮が積み重ねられていた。
 「木の皮は、むく季節がありましてね。間伐した木を寝かせておくと、スルスルときれいにむけるようになります。でも、今はそういうこ

秩父の森林組合で求めたという。
 「職人も檜原村にはいなくて、五日市に一人いる職人さんが、助手と2人で、半月ぐらいかかって暮してくれました。昔は、この村にも『結』のようなものがあって、僕が4〜5歳の頃に暮き替えた時には、近所の人が大勢手伝いに来てくれたものです。カヤトと

とをする人もいなくなつた。木の皮は機械で粉々にして、ゴミにしまつてんです」
 かんづくり荘の屋根の場合、一束およそ9000円のこの皮を、1回の暮き替えて1500束から2000束ほど使う。5年前に暮き替えた時には、不足分が檜原村で入手できず、

いう、茅を栽培する広大な場所があつて、日を決めてみんなで背負いに行くんです。そういう地域の連携ができていたんですよ」
 暮き替えは、以前は40〜50年に1回でよかったが、最近では20年もたないという。
 「囲炉裏を使わなくなったからです。昔は囲炉裏で薪を焚いて、家の中を煙だらけにしていたでしょう。煙に含まれて入る防虫成分が屋根を守つたんですよ。そんなこんなで、最近、トタン屋根にしてしまふ家も多いんです。トタンだと600〜700万円できて、50〜60年持ちますから……」
 周辺の家がトタン屋根に変わっていく中で、山崎家では家族が力を合わせて茅葺きの家を守ってきた。しかし、それに伴う負担はあまりにも大きい。個人の家であつて、日本の財産ともいえる古民家。伝統的建築美を守るため、私たちに何ができるのだろう。

檜原村観光協会数馬支部 ☎042-598-6789
 文・小田礼子/カメラ・小林 恵

身延山信仰の宿場町

赤沢の講中宿 山梨県早川町

南アルプスの南端に位置する赤沢は、身延山奥の院と霊山・七面山を結ぶ参道の中間に開けた宿場町である。江戸後期から昭和初期のピーク時には年間の宿泊客が30万人を数え、参道を行き交う信者がひきも切らなかつたといふこの赤沢も、今では宿泊客が1万人足らずと、すっかりさびれてしまった。戦後、旅行の志向が変わり、登拝者が減つたうえに、バス路線の整備で、赤沢に泊まらずとも七面山に行

けるようになったからである。
 集落の一番下にある、江戸屋」は、室町時代からつくく家柄。27代目女将によると、

「母屋は明治10年頃に2階建てにしたと聞いております。講中宿は1度に多くの人が入り出すため、部屋をぐるりと囲んだ廊下のごくからでも直接出入りできるようになってます」
 1階の座敷は、襖を閉めれば6部屋に仕切れるが、周りを縁側で囲まれてるので、他の部屋を通らずに出入りすることができる。障子が全面的に取り入れられ、壁面積の少ない開放的な空間だ。しかし、強風の時や



冬のシーズンオフになると、外側に建具をはめて建物を守る。軒下には、屋号、講名などが

記入された板マネギ(登拝者たちが宿泊の印に残した札)がズラリと貼られ、これも一つの建築意匠になっている。

赤沢宿には、修復された民家が10数軒ある。また、身延往還の石畳も整備され、見ごたえのある町並みとなったことから、平成5年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

・江戸屋旅館
 ☎0556(45)2162

飛騨の匠技術をいまに

岐阜県古川町

室町時代、国司として古川盆地を治めた京都の公卿、姉小路

家の時代を経て城下町、天領(幕府直轄地)として発展した古川は、京の「雅」と江戸の「粋」が融合した城下町の面影を残しており、高山市と並ぶ飛騨文化の町。

明治、大正代の木造建造物をいまに伝える街並みは、「飛騨の匠」の流れを汲む大工たちの手によって造られたもので、道路脇を流れる瀬戸川の清流と共に独特の雰囲気を出している。

祭りを創出してまちおこしと観光地化をめざす町のシンボルが、祭りの広場にあるまつり会館と飛騨の匠文化館。古川には

川を活かす 里を活かす

29分カラー



「豊かな自然、伝統文化等の地域資源を生かした観光地」をテーマに、鳥根県邑智郡内の6町村の住民や行政が、江の川と上手に付き合いながら、その豊かな川の恵みを地域づくりに活かす取り組みを紹介しました。

この作品を多くの方々にご覧いただき、できれば江の川流域の町村を訪れて、その素晴らしさに触れあっていただきたいと思います。願いました。

- | | | |
|-----|------|-----------------|
| 邑智郡 | 桜江町 | えんこう祭 / 鮎神楽 |
| | 川本町 | アドベンチャーレース |
| | 邑智町 | カヌーの里 |
| | 羽須美村 | ホテル |
| | 瑞穂町 | オオサンショウウオ(大山椒魚) |
| | 石見町 | 香木の森 |

製作・著作 / (社)日本観光協会
 「全国広域観光振興事業」
 企画・監修 / 全国過疎地域自立促進連盟
 制作 / ㈱桜映画社

編集後記

民家を保存していくことは厳しく、ましてや民家による地域おこし、町おこしはさらに厳しく大変だということを実感した。しかし奈良井宿、大内宿、白川郷等では親子、孫もいるにぎやかな家族の暮らしがあった。都市からお嫁さんもかなり来ていて、「冬の寒さを除けば民家の暮らしはとても快適、民家を通じて都市との交流を深めたい」と若い女性たちは張り切っている。一方で、観光客の民家への理解やマナーについては問題も多く、風土と暮らしを共感しあえる環境づくりと提案が必要だと痛感した。(A)

DePOLA No.22

[でばら] 2002年春夏号

発行日 / 平成14年3月5日
 発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会
 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
 オカモトヤビル8階
 ☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602
 http://www.kaso-net.or.jp/
 編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい
 編集工房アド・エー

INFORMATION

上 / 古川町の町並み 下 / 旧五十嵐家



いまも大工が180人おり、匠としての技と誇りを伝承する活動を行っている。

古川町役場町づくり振興課
 ☎0577(73)2111

只見町は民家の里
 旧五十嵐家、旧長谷部家

江戸時代中期における会津平坦部の典型的な本百姓農家の家屋とされる五十嵐家住宅。床面積は約121平方メートル、梁

束に1729年(享保14年)の墨書が発見されている。

土台がなく、丸石の上に直接柱が立てられていること、また応接間に当たる「なかのま」が土間のままであることなど、当時の農耕生活を伺える多くの古い様式が残っている。昭和46年3月に国重要文化財に指定された。近くには、県重要文化財に指定されている大規模な曲り家、旧長谷部家もある。江戸時代後

期の建物で、旧越後と会津を結ぶ八十里越えの口留番所だった。只見町(福島県南会津郡)には通称「たもかく」(只見木工加工組合)の古民家を再生した交流施設や都市から移住してきた人の民家住宅も多数あり、民家についての相談に応じしている。五十嵐家、長谷部家はJR只見線只見駅からバス10分。問い合わせは只見町観光協会 ☎0241(82)5250

古民家再生の団体・会社

日本古民家再生
 リサイクル協会

日本の民家の保存と再生・リサイクルを目的に平成7年に設立、啓蒙活動(年6回情報誌「民家」発行、年1回民家フォーラム他)、情報収集・提供を行っている。民家の再生見学会、民家生活体験なども開催するほか、民家

に住みたい人に提供する「民家バンク」、古材を扱う会員相互の交流と古材流通を促す「民家古材ネットワーク」などがある。NPOとなり現在会員は2200名。東京都千代田区平河町2-5-19 ☎03-5216-3541

古材バンクの会

取り壊される木造建築の材料をストックしておき、文化財の補修や町家の再生などに活用したいと、京都府の廃材や民具の再利用をはかる委員会の活動を契機に、平成3年に任意団体として設立。13年にNPOになった。再利用が可能な木造建築の提案者と利用者のネットワークをつくり、技能研修会や講演会、再生生活のための研究・助言等を行っている。古材情報は、会員以外に一般の問い合わせにも対応、店舗の内装に古材を活用する人が多いという。古い家で使いにくいと悩んでいる人もぜひ相談をと呼びかけている。

京都市東山区本町17丁354 ☎075-532-2103

石川工務店「古材ギャラリー」

鎌倉時代から続く宮大工の家系で、現在も社寺や文化財建造物の保存・修理を手がけている(株)石川工務店が、日本民家再生リサイクル協会の要請もあって、平成11年にオープンした「ギャラリー」。展示されている古木は約300本、全部で1000本以上あり、磨かれた太い柱や梁は活用を待っている。個人の見学も可。

山梨県塩山市上於曾1990 ☎0553-32-2170

旭住研「古材塾」

神奈川県内の旧家や社寺建築の建て替え等を手がけており、古材を再利用したいと「古材塾」を開設した。古民家再生では大工や左官、建具師などの職人集団を持ち、確かな技術力が自慢。古民家再生住宅も見学できる。横浜市泉区和泉町5042 ☎045-801-4557

本誌は財団法人日本宝くじ協会の
助成を受けて作成されたものです。

いっしょにいっしょ いっしょにいっしょ いっしょにいっしょ までも、いっしょ いっしょにいっしょ いっしょにいっしょ

21世紀もあなたの夢と街づくりのために、
宝くじはがんばります。

二科展デザイン部 入選作品
流郷 美知子

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの取替金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人 **日本宝くじ協会**

皆さんはしっかり買って、夢を叶えよう。

宝くじのホームページ

http://www.takarakuji.nippon-line.jp